

大島塾新聞

ムロノキ新聞社 21号



五島列島釣行記

令和五年六月一日(小潮) 満潮十三時 干潮二十時

今年五月二十九日という異例の早さで梅雨入りした。南方の台風の影響もあって前日、いや当日になっても天気予報がコロナ変わった。前回の反省から荷物を減らすことを努力目標に掲げたところ、みんな真面目に取り組み今回は渡船のポーターさんに叱られることはなかった。天気予報を信じ「雨は降らない」とタカをくくった筆者は、そんなこともあってテントを持たずに磯上りすることにした。

前日十六時半、このところすっかり固定したいつものメンバーが壇ノ浦SAに集合。宇田・谷川両君とは半年ぶりの再会で互いの健康を祝し、良い一日を思い描いて佐世保を目指した。十九時過ぎに佐世保に着き、しばらくぶりに「お栄さん」の暖簾をくぐったところ、正面に波羅門渡船の社長ご夫婦を見つけた。あまりの奇遇に驚きひとしきり挨拶して、全員でちゃんぽん、それからきくらげたっぷりの焼き飯を二皿注文した。これこれ、海鮮中華風の汁に

野菜、かまぼこなど具たくさんのちゃんぽんは約束の味。先に店を出る社長に「明日はよろしくお願います」と声をかけ見送ると店員がやってきて「お代は貰いましたかい」という。あわてて追いかけてお礼を言うとう片手をあげて去っていった。姿形はかなり違うが高倉健さんみたいだった。いつものかめや釣り具でエサを買って波羅門渡船に着いたのは二十一時過ぎだった。「明日は六時半出船」と聞いたので早めに床に就いた。

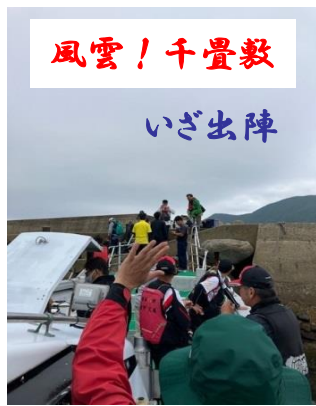
翌朝目覚めると曇りの穏やかな朝だった。コロナ禍が一応の落ち着きを見せ第五類に変わったこともあって、多くの釣り客でここも賑わいを取り戻した感がある。釣り場の相談をしていると船長曰く「今日は南風の強よかけん、いつものところは難しかですよ」。素直な筆者は風裏になる六島の北側の地磯に上げてもらうことにしたが、テント泊を頑なにゆずらない残りの面々はいつもの六島の南側、「千畳敷」を希望した。この筆者と彼らの選択はその後の運命を大きく左右することになる。



【千畳敷く谷川レポート】

今回も当初の天気予報は雨であつたが、釣行が近づくにつれ予報は晴れに変わっていった。出航前までは自分の晴れ男振りに鼻高々だったのに、こんなことにならなくて・・・。

当初の予定では、小生と宇田さんが福祉の波止、向根さんと木村さんは千畳敷に上がるはずだったが、ポーターさんの「午後から南東の風が強くなるので、釣りが難しくなる」との一言で雲行きが怪しくなってしまう。風裏となる六島の北側に上がる手もあつたが、平地がほとんどないため、この4人は釣りよりも安眠を優先し、波止でテントが張れる千畳敷に上がることにした。



今回の釣行では、小生は本来のルアーマンに戻り、ランガンスタイルで釣りをするプランであつた。そして二つの目標を立てた。一つはハダカ瀬でのキャストイング鯛ラバで真鯛ゲット、もう一つは墓の下でのキジハタゲットである。

千畳敷上陸早々、まずはハダカ瀬に行った。今までの福祉の波止からのがか釣りで真鯛が釣れるポイントが二カ所あるのはわかってる。まずは沖側のポイントに鯛ラバをフルキャストしてみたが、狙っているポイントに届かないため、もう一カ所の福田兄ご愛用のハダカ瀬先端からのキャストを開始した。すると二投目のフオール中に大きな魚がヒットした。強い引きに耐えながら浮き上がってきたのは五十八センチの真鯛。持っていた網枠四〇センチのタモでは掬えず、岩場にずり上げた。



今回はみごと狙いの的!

さてここからが大問題で、クレーも困るし、下手にベテ味が落ちる丘を越えて延々と千畳敷までそのまま持ち込み、向根さんに助けてもらった。その後ハダカ瀬に戻って、キャストイング鯛ラバを再開したがまた二投目に今度は五〇センチの真鯛が釣れた。今後は自分で千畳敷に運んだが、荷物の回収を含め、短時間での千畳敷とハダカ瀬の三往復はさすがに疲れた。

しかし、今回は天候に不安があり、疲れたなどと云っている場合ではない。すぐにグーグルで入手した六島の航空写真を手に墓の下に向かった。

千畳敷から墓の下まで行けるはずだったが、それらしい道はいずれも草や木に覆われて通行不能となっていて、墓の下まで到達することができなかつた。

その彷徨の際に、「墓の下」の由来と思われる墓を発見した。整備され規則正しく墓石が並ぶ墓地を勝手に想像していたが、実際は木々に覆われ、かすかに日が差し込む古い墓石が一つあるだけだった。というか何か出てきそうな非常に見た瞬間にすぐに慌てて引き返してしまった。なんでも写真に撮る小生であるが、確実に崇るか心霊写真になりそうで、撮影する気すら起きなかつた。

墓の下釣行は諦め、六島の廃墟を探索してみたところ、学校跡付近で四匹のヤギ家族御一行に遭遇した。珍しいと思っしつかり写真に収めたが、その後ヤギたちは千畳敷の波止場付近でずっとのんびりしていて、いつでも写真が撮れる状況であった。

午後になって千畳敷や三四目のドジョウを狙ってハダカ瀬に再度行って、いろいろなルアーを投げたが、風が強くなり魚も釣れないため、夕方になり千畳敷の波止で TENT を張った。今回初めて用意した福田兄や木村さんお奨めのエアーマットの小型版も無事設置したところから、小雨が降り始めた。

当初は雨が降ったり止んだりしていたが、だんだん雨が強くなつたため、みんな自分のテントで一休みすることにした。

さてここから悲劇が始まる。そもそも木村さんのテントは天井がメッシュになっており、雨には対応できず千畳敷の「屋根」の下に避難した。小生は午前中のウォーキングで疲れていてテントで寝ていたが、宇田さんと向根さんのどちらのテントからも響いてくる「雨が漏っている！」という叫び声が目覚めた。しかし雨は降るしエアーマットも快適でそのままボーっとしていたが、寝返りを打った際に何か床の冷たいものに気付いた。そう、小生のテントも雨漏りしていたのである。せっかく快適生活を求めて千畳敷に上がったのに、まさかの全員テント雨漏りとなってしまった。ヤギも千畳敷の岩場で雨宿りしていたが、福田兄たちはどうやって雨をしのいだのだろうか？

筆者はこうして雨をしのぎました



その後雨は止んでも風が強い状態が続き、今回はほとんどカゴ釣りや投げただけで、四〇分の尾長グレと四〇分&三〇分の口太グレが釣れた。打率三割で宇田さんから褒められて嬉しかった。今回は根魚が釣れなかつたので、満点とは言えないが満足の行く釣行となった。

今回の教訓

- ① 魚のメ方をしっかり学んでおくべし
- ② ランガン時の魚の保存&運搬法を検討すべし
- ③ 千畳敷に上る際は、ほうきを持参し上陸したら直ちにヤギの糞の掃除をすべし。
- ④ 同じく千畳敷に上る際は、シンクロナイズドスイミング用の鼻栓を持参すべし

(谷)

実際向根と木村に話を聞いても、谷川君レポートの通り、強風で釣りをできる時間は少なく、テントを張ってもみんなびしょ濡れ、おまけにテントの下にたまった水はヤギの糞まみれで、もはや事故じゃん。それでも向根は一尾長が釣れたからよかった」と振り返っていたので、釣り師としてのメンタルはかなり強い。もう一つ、心霊写真は決して撮らないでください。以下はこちら側からの報告。

筆者が上がったのは風裏になる北側、正面に宇久島を望む足場のよい地磯だった。今回は筆者より一回り年下の卓也を連れてきた。かつて一緒に周防大島でチヌを釣り、二十数年ぶりに転勤でこちらに戻ってきた古い釣り仲間である。久しぶりに逢って釣りの話をしていると、どうしても連れて行ってほしいというので今回の同行となった。



沖は宇久島。下げ潮は右から左前方へ、上げは左から右に流れた。

この時期日中はエサ取りのタカベに翻弄されることが多いのだが今回は様子が違った。筆者仕掛けは0号ウキ、道糸PEの0・六号、ハリス一・五号、グレ針五号、ウキ止めなし。ウキが見えなくなったらラインの走りアタリをとる(うくんなんど玄人っぽい)。何匹か小型グレをリリースしていると強い当たりが来て、四五分の良型口太グレを釣り上げた。タカベはいないし、好釣の予感がむんむんしてきた。

やがて予感 realism のものとなり三〇〇の口太が次々に当たってくる。確かに釣れるのは楽しいのだが、一方で今の時期の口太は脂が落ちて味がよくないのが常。冬場なら大喜びで持って帰るが、今回は良型二〇三尾だけ持ち帰ることにしてあとは海に返した。尾長グレ、強くていつでも旨いアイツ、筆者はこれを釣りたいのだ。

午後になるとぼつぼつ雨が降り出し、徐々に雨足が強まってきた。荷物を濡らすまいと荷物にブルーシートは掛けたものの、「この雨が一晚続いたら・・・」と不安と弱気の虫が騒ぐ。いつもの南側なら雨をよけられる洞があるので、向根に電話して磯替わりをほのめかすと「風が強すぎて釣りにならん」と。やむなく我々は「ここで一晚過ごす」と腹をくくった。その後もひとしきり降り続いた雨だったが、十八時を過ぎてやっと小降りになり西の空には晴れ間がのぞき、ふと山側を振り返ると虹がかかっていた。



撮影:谷川幸治

「きつと幸運の予兆ですよ」と卓也が声高に叫ぶ。まもなく夕暮れを迎え、その通りゴールデンタムが訪れた。久々の尾長に何度かハリスを切られたが、それでも三五〇四二尾長を五尾手にした。傍らの卓也、この日が初めてのグレ釣りだと聞いたが、それでも良型混じりの口太をすでにそこそこキープしていた。

「違うのがきましたあー」というひきつった声に振り返ると、間違いなく良型尾長の引きである。まあ釣り上げることはできないだろうから、「ゆつくりやつて」と返して竿を置き、おっとり刀でタモ網を持っていくと、ドラグを滑らせながらも徐々に魚が上がってきている。なんと初チャレンジで四二尾の尾長を釣り上げてしまった。筆者驚嘆、満面笑顔の卓也、おそらく生涯思い出の一回になることだろう。



人生初尾長42cm、卓也51歳

十時を過ぎて、アタリが遠のき雨の気配もないのでゆつくり休もうと寝袋を広げたところ、夕方の雨でこれがびしょ濡れになっていてとても寝られたもんじゃない。どうしようもないのでシュラフカバー(寝袋がすっぽり入る防水用の袋)だけで寝ることにした。幸い寒くはなかった。しかし時々陰干しはしていたが、二〇年来洗っていないなかったのだから臭い。例えるならば、三日風呂に入っていない男の〇玉の脇を掻いた時の指先の臭い。何とか寝ようと努力したが、三時間保たずに逃げ出した。気が付けに熱いコーヒを淹れ、釣りを再開した。何が幸いするかわからないのが人生、明け方にはこの時期旬のイサキを釣り上げることでできた。体高があり黄色みを帯びた四〇尾、臭いシュラフカバーよ、ありがとう(帰ってすぐ洗濯しました)。

【釣魚食】

最近魚好きの間で「熟成」が秘かなブームになっている。活魚を丁寧に処理して十〜十四日寝かせていたのだというもの。釣りたての魚はコリコリ弾力があって、それはそれで美味しいが、時間が経つとたんぱく質が分解されてグルタミン酸やイノシン酸などのアミノ酸が増えて旨味が出てくる。

この過程を熟成という。このブームの火付け役の一人が宮崎県で水産業を営む津本某氏である。

筆者も二年前から「津本式熟成法」に取り組んでいる。釣った魚をベテシツカリ血抜きし、家に帰ったら写真の機材で残血と脊椎神経を取り除く。内臓を取り出し代わりにキッチンペーパーを詰め、鮮魚ペーパーでくるみ厚手のビニール袋(専用)に入れて空気を抜き冷蔵庫で寝かせる。筆者は七〜十日程度で食べることにしているが、この間何度もこの作業を繰り返す。ペーパーが魚体の水分を吸い取ることで、旨味が濃縮される。初めは夫婦二人で味わっていたが、腹を壊すこともなかったのが最近では親しい近所の友人も招いて熟成魚の刺身を楽しんでいる。

五島から帰ってすぐ尾長グレ一尾を処理し、一週間後きれいな真鯛を釣り上げたので姿造りにして前面に熟成尾長の刺身を並べた。自宅に三十代から六十代七名が集まり宴会を開いたのだが、全員がこの熟成尾長を美味いと褒めた。え、筆者ご満悦の一夜となった。(福)



熟成尾長の刺身と釣りたて真鯛の姿造り

# gallery

## 津本式釣魚熟成術



この装置で血液と脊椎神経を除去する



家内は「釣り師に連れ沿って30余年、今までで一番おいしい」と笑った。

